
ポケットモンスター 龍を従えし少年

魔龍帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター

龍を従えし少年

【Nコード】

N9149Y

【作者名】

魔龍帝

【あらすじ】

ある程度まとまってから、またあとで書きます。

始まり……

『それじゃあ、行ってくるね、ばあちゃん、姉さん』

『行つてらっしゃい、たまには連絡しなさいよ。私の相棒、大切に
しなさいよ』

『わかつているって。それより姉さんもいいかげん結婚したら？た
だでさえ遺跡調査で男との出会いがない……』

ゴッソ！

『余計なお世話！』

『い、いてーな。』

『これこれ、喧嘩するではない、それではリュウ、行つてらっしゃ
い。』

『ああ、行つてきます。』

これから、世界を巻き込む冒険が始まる。

少年 リュウは旅先でいったい何が起ころのであろうか？……

主人公紹介

リュウ

16歳

身長173cm

容姿 金髪に透き通るような青い瞳

一応ジムバッジはホウエンとシンオウを全て持っている。

カンナギタウン出身

とある理由でイツシュ地方に旅に出ることになった。

使用ポケモンはいわゆる厨ポケが多い。

とてもやばいポケモンを持っているらしい

性格はクール。

使用ポケモン

ボーマンダ

リザードン

ガブリアス（借りてる）

サンダー

??????

??????

ちなみにボーマンダは最初の相棒

?????はジョウトの伝説のポケモン

?????はシンオウに出てくるポケモン

主人公紹介（後書き）

次回から本編スタート

第一話

今、リュウはイツシュ地方にある空港があることで有名なフキヨセシティに来ていた。

『此処がフキヨセシティ…さてと、早速ジム戦といきたいところだが、あいにく今日はもう遅いな。』

外はもうすっかり日が沈んでいた。

リュウside

今、俺はポケモンセンターで食事をとっているところだ。ちなみにサンダースも一緒だ。本当は皆でとりたいけど、俺の手持ちは重量級ばかり……

あとあのポケモンもいるからな。

『サンダース、美味しいか?』

『ダース!』

どうやらこのフーズが気に入ったようだ。

さてと、食べ終わっただし、特訓するか。

俺は外に出る。

少し歩いて、森の中にきた　よし、此処で特訓するか。

『出てこい、ボーマンダ!!』

『マーンダ!』

凄まじい咆哮とともに俺のボーマンダが姿を現す。

『ボーマンダ、あの木に向かってドラゴンダイブ!!』

『マンダ!』

ボーマンダは羽を広げ、低空飛行をして木に突撃していった。

木に真つ二つに折れた。

『相変わらず凄い威力だ。明日はお前を先発で出す。』

『マンダ！』

そうボーマンダと話していたら、後ろから声をかけられた。

『ボーマンダかゝ珍しいな』

『あなたは？』

『ああ、ごめんごめん、私はフウロ、よろしくね。』

フウロが挨拶をしてくる。

そこで、俺は改めてフウロの容姿を確認する。

赤みがかった茶髪を頭頂部分でプロペラみたいな髪留めで留め、服装は……青空みたいな色をした服なんだけど……。

……かなり露出が高い服装だ。

……正直目のやり場に困る。特に胸が……

『俺はリュウ、宜しく。ところでフウロはどうして此処に？』

『さんぽをしていたら音が聞こえてね、君が特訓をしていたわけ、それにしても君のボーマンダ、凄いパワーだね』

『ああ、今、明日のジム戦に備えて特訓していたんだ。』

『ジム戦?。』

『どうしたんだ?』

『実は私がジムリーダーなんだ。』

『そうなんだ、明日はバトルをしてくれ、』

『いいよ、君の挑戦、受けます。そういえば君、どこかで見たような?・・・』

!..... 思い出した。スズラン大会チャンピオン、リュウ、圧倒的なパワーであのタクトをもねじ伏せた・・・』

『・・・ばれたか、』

『名前聞けば誰でも解るよ。(明日はぼろ負け確定.....)』

『そうか・・・この事は黙っておいてくれないか?』

『いいよ。後、君があの人の子だったこと。』

『!、知っていたのか?』

『まあ、あの人に昔お世話になったから。』

『そうだったんだ。』

『あ、もうこんな時間！

それじゃ、夜更かしはお肌に悪いから、じゃあね。』

『それじゃ。』

フウロは去っていく。

俺も明日は頑張るぞ！

フウロside

・・それにしても彼、かつこよかったな／／／
何だか明日は楽しい日になりそう！

第一話 （後書き）

次回はジム戦です。

ちなみにフウロはヒロインです

オリキャラ募集です

第二話（前書き）

今回はジム戦です

第二話

リユウside

今俺は最終調整をしている。

今日はジム戦がある。気を引き締めて行かないとな。ちなみに今日のメンバーは決めてある。

ちなみに昨日、フウロにこう言われた。

『君とのバトルは全力でいかなくてはいけないんだ。』

なぜかって？

聞いた話によると、普段のジム戦では挑戦者のレベルに合わせているらしい。俺みたいなリーグ優勝者など、上級者には本気でいかなくてはならない。だとか、

ポケモン達は平気みたいだし………
そろそろ行くとするか

『さてと。お前ら頼むぞ！』

俺はポケモン達にそう言った。

ジム

『・・・待っていたよ、リュウ』

『今日は挑戦をうけてありがとな。』

『どういたしまして、それじゃ。早速だけど始めようか!』

そう言うのと、フウロの表情が変わった。獲物をしとめるような鷹の眼に…………

・・・これがジムリーダーの気迫。

『これより、ジムリーダーフウロ対挑戦者リュウとの試合を始めます。使用ポケモンは互いに2体。では始め!!』

『行って、アーケオス!』

フウロはアーケオスを出してきた。

確かあのポケモンは最近化石から発掘されたばかり、あまりでまわっていないはず。なぜフウロが持っている?・・・だが今はそんな事は気にしていられない。

アーケオスのタイプは確か岩飛行。特性は弱気

能力は攻撃と素早さがとても高いはず、

『アーケオスか、ならこっちは、いけ、サンダース!』

『ダース!』

『サンダース、油断するなよ。飛行タイプだとしてもそう上手くはいかない』

わかったと頷くサンダース

『では始め!!』

『こっちから行くよ!アーケオス、地震!』

アーケオスは尻尾を地面に叩きつけて地震を起こした

『!、ジャンプして避けるサンダース!』

俺はそう指示を出す

しかし

『そうはいかないよ、アーケオス、諸刃の頭突き!』

フウロが指示を出すとアーケオスは頭部に力を入れて頭突きしてきた。

それはあたりサンダースを地面に叩きつける!

『サンダース！………なんてね』

俺は笑みを浮かべる

『！、もしかして』

サンダースの体が煙となって消える

『身代わり！いつにまに！』

『地震を放った時につくったんだ。俺のサンダースは技を速く繰り出せるからな』

『（いつ、指示を出したって言うの？）本物はどこ？』

上からサンダースが姿を現す

『サンダース、雷だ！！』

『ダース！』

サンダースは雷を放つ、アーケオスにクリーンヒット、

『アーケオス！、』

『アーケオス戦闘不能。サンダースの勝ち！』

『く、まだまだこれからよ。』

『ああ、いくぞ！』

『行って、ウォーグル！』

『ウォーグルか、サンダース、まだいけるか？』

『ダ、ダース』

『よし、ならいくぞ！、10万ボルト！』

『遅いよ、ウォーグル！ブレイククロー！』

『ウォグ！』

ウォーグルは爪を使って、攻撃してきた。

『避ける！』

『遅いよ』

ブレイククローは見事に命中

『サンダース！、』

『サンダース戦闘不能、ウォーグルの勝ち！』

『まさか、一撃で、』

『私のウォーグルをなめない方がいいよ。』

フウロは低い声で言ってきた

『く、ならゆけっリザードン！』

『グワァー！』

『リザードン……気迫が凄い。それに色ちがい……』

通常のリザードンは赤色、しかし、俺のは黒い。

『そう、俺のリザードンは色ちがいなんだ。こいつがひとかげの時に雨で濡れているところを保護したんだ。』

『そうなの、でも今はバトル、いくよ、』

『ああ、リザードン、にほんばれ、』

そう言つとリザードンにはほんばれでまわりを明るくした。

『ウォーグル、ブレイブバード！』

『リザードン、オーバーヒート!』

互いのエネルギーがぶつかり合う。しかし、俺のリザードンがおし
てる。

『フルパワーでオーバーヒート』

『グワー!』

『ウォーグル!フルパワーでブレイブバード!』

互いの技が爆発して消し去った……

『リザードン!』

『ウォーグル!』

『く、お互いもう体力があとわずか。ウォーグル、頑張つて!』

『ウォーグ……』

『リザードン、頑張れ!』

『グワー!』

『リザードン、炎のパンチ!』

『こっちも、ブレイククロー!』

リザードンは拳に炎を貯め、ウォーグルは足に力を入れる。

『『いつけー！！』』

互いの技が激しくぶつかり合う。

そして、

『グワァー！！』

リザードンが押してきた。よくみるとリザードンの体が赤く光る

『特性猛火だ……』

『そういえば、リザードンの特性は猛火。』

猛火とは、ピンチになると、炎技の威力が上がる特性。今のところこの特性を持っているのは15体しか見つかっていない。とても珍しい特性である。

『いけ、リザードン、炎のパンチ！』

やがてウォーグルが競り負け、壁に叩きつけられる。
目を回している。戦闘不能だ。

『・・・ウォーグル戦闘不能！、勝者リュウ。』

『よっしゃー！！』

『あーあ、負けちゃった。さすがリーグチャンピオン』

『お前も強かったよ。』

『ふふ、ありがとう、はい、このジムのウイングバッジ！』

フウロが青く輝くウイングバッジを渡してくる。

『ありがとう、（これでひとつめ、*****待っているよ）』

『あのさ、君の旅について行っていいかな？』

『はい？』

第二話（後書き）

次回は新キャラ登場です

第三話

『君の旅について行っていいかな?』

『はい?』

今なんていった、このジムリーダーは、

『だから、君の旅について行っていいかな?』

『…お前、ジムリーダーだろ?旅なんか出来ないだろ』

『大丈夫、代わりになる人ならいるから。いいでしょ、お願い!』

フウロが頭を下げてくる。 うーん、困ったな。でも、バトルする相手がいないからちよいといいか。 でも何で旅に?

『別にいいけどなぜ旅がしたい?何か理由があるんだろ?』

『実は君とのバトルで思ったんだ。まだまだ私も未熟者なんだなつて…だから一からやり直そうと思って。』

『なるほどな、』

フウロはトレーナーとしてのレベルが非常に高いというのはあのバトルでわかった

。 ……俺の返事はただ1つ

『フウロ、一緒に旅しようぜ。俺も一からやり直そうと思ってイッ

シュ地方にきた。チャンピオンのアデクさんに挑戦するために。」

『ありがとう!』

フウロは笑みを浮かべる。

『それじゃ、俺はまだ用があるから、また明日な。ポケモンセンタ―の前に集合。ちゃんとポケモンを休ませておけよ。』

『わかった。それじゃ、』

『また明日な。』

俺はフウロと別れる。

『着いたな。久しぶりだな。此処に来るのは……』

俺が用があるのは

『タワーオブヘヴン……』

そう。タワーオブヘヴン……ちょっとお参りにな。

俺はタワーをのぼっていく。

そして、最上階につく。

『出てこいボーマンダ』

『マンダ！』

『お前の母ちゃんと父ちゃんの所に着いたぞ……ちゃんと挨拶しておけよ。』

『……………』

ボーマンダは頷く

ここですでに気づいている人もいるだろう。そう、このタワーオブヘヴンにボーマンダの両親が眠っている。ボーマン

ダがタツベイの時、タツベイの目の前で両親がポケモンハンターに殺された。

なぜかって？ボーマンダの母親は色ちがいの珍しいボーマンダ、父親は母をかばって殺された。母親は抵抗して、ハンターのマニョーラの冷凍パンチで。その時は俺は俺は七歳。何もできずにただみていた。俺は何で無力だったんだろう。俺に力があれば両親を守れたはず。

『さてと、鐘でも鳴らしていくか。』

ここには、魂を浄化させる鐘がある。

『よし、鳴らすか。』

ゴーンゴーン

綺麗な音色が響き渡る。

『いい音色だな。ボーマンダ、行くぞ。』

『マンダ……』

ボーマンダは悲しそうだ。

『ボーマンダ、俺たちはもっと強くならなきゃな。そのためにもイツシュ地方の全てのジム制覇だ。』

『マ^ンダ^ッ！』

ボーマンダは大きな声で返事をした。

さてと、次はホドモエシティに行くとするか。

第三話（後書き）

次回は速くも主人公、リュウが持っている謎のポケモンが登場です。

多分予想はつくと思いますが……

次回もお楽しみに！

第四話（前書き）

今回はリュウのポケモンが2匹登場です。

どちらも厨ポケですが……

第四話

あれから、俺はポケモンセンターに戻り明日に備えて準備をしていた。

俺は1つのボールを出す。そのボールは……

『ここであら平気だな。出てこい、セレビィ。』

『ビィー！』

俺が部屋で出したポケモン。それはときわたりポケモンのセレビィ。何で手持ちにいたって？、それは内緒。

『セレビィ、ごめんなあまり外に出せなくて。一応幻のポケモンでもあるし……』

『セレビィ。』

セレビィは気にしないでと言っているのか首を横にふった。

……俺としては普通に過ごしたい。でもセレビィはとても珍しい存在。

おばあちゃんと姉さんには、あまり人前で出すなと言われている。

……でもフウロには教えても問題はないだろう。いずれかは言わなくてはならないし、

『忘れてた。今日、モモンの実があったんだ。セレビィにあげようと思って採ってきたんだ。甘いものが大好物だろ。』

俺はセレビィにモモンを渡す。

『セレビィイイイ！』

セレビィはとても喜んでいた。

実はセレビィはとても甘党。甘いものには目がない。

セレビィはモモンを食べる

『ビィ
♪』

とても嬉しそうだ。

『セレビィ、ボールの中で聞いていたと思うけど、明日からフウロと一緒に旅をすることになる。セレビィのことは言つつもりている。いいな？』

『ビィ。
』

セレビィはいいよと頷く。

そこでドアからノックしている音が、

『セレビィ、一回戻ってくれ。』

『ビィ』

『誰ですか？』

『私です、ジョーイです』

ジョーイさんが？どうしたんだ？

『どうしましたか？』

『リュウさん、お電話です。あなたのお姉さんから。』

『わかりました。今行きます。』

姉さんからか……どうしたんだろう？

『リュウ、1週間ぶりね。』

『姉さん、一体どうしたの？』

『実はあなたの持っている*****が私の研究に必需になっちゃつて……』

『……それで*****を送って欲しいと、わかった。送るよ。ちなみにガブリアスは？』

『ガブリアスはいいわ、あの子はバトルをしたがっているだろうし。』

リュウ、あなたが持っていた方が良いわ。』

『わかった。それじゃ、俺のあのポケモンを送ってくれない?』

『ああ、あのピンクの悪魔ね……』

『……姉さん、人のポケモンを悪魔扱いしないでくれる?……まあ確かにあいつの耐久力はあの道具のせいで半端ないからね……』

そう、リュウが言っているポケモンはラッキー。進化前のポケモンに持たせると防御が上がる道具、【進化のきせき】を持っている。読者の皆さんならあの耐久力の高さには参っただろう……

ちなみにラッキーはあまり使いません。バランスが崩壊するので

by 作者

『送るよ。』

俺は****を送る。そして、姉さんの方からラッキーが送られてきた。

『届いたわ。それとあなた、フウロと旅をするんでしょ?』

『ああ、そうだけど、それがどうかした?』

『いくらあの子が可愛いからって襲っちゃ駄目よ』

ブッン!

俺は即電源を切った。

……別にそんな気はない。

俺はボールからラッキーを出す。

『ラッキー、またよろしくな。』

『ラッキー！』

ラッキーは返事を大きな声で返事をした。
お腹に入れている石を光らせながら。

第四話（後書き）

次はポケモン紹介です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9149y/>

ポケットモンスター 龍を従えし少年

2011年12月13日11時51分発行